

プロコフィエフ:交響曲 第1番 二長調 op.25 「古典交響曲」(約15分)

Sergei Prokofiev : Symphony No.1 in D major, op.25, "Classical"

- | | |
|--|--|
| 第1楽章 アレグロ
Allegro | 第2楽章 ラルゲット
Larghetto |
| 第3楽章 ガボット:ノン・トロツポ・アレグロ
Gavotta : Non troppo allegro | 第4楽章 フィナーレ:モルト・ヴィヴァーチェ
Finale: Molto vivace |

ストラヴィンスキー:バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)(約25分)

Igor Stravinsky : L'Oiseau de feu (The Firebird Suite) (1919 version)

- | | |
|--|--|
| I. 序奏
Introduction | II. 王女たちの Rond
Ronde des Princesses |
| III. 魔王カステイの凶悪な踊り
Danse Infernale du Roi Kastcheï | IV. 子守歌と終曲
Berceuse et Finale |

— 休憩 (20分) — Intermission

チャイコフスキー:交響曲 第5番 ホ短調 op.64 (約45分)

Piotr Il'yich Tchaikovsky : Symphony No.5 in E minor, op.64

- | |
|--|
| 第1楽章 アンダンテ-アレグロ・コン・アニマ
Andante - Allegro con anima |
| 第2楽章 アンダンテ・カンタービレ・コン・アルクーナ・リチェンツァ
Andante cantabile con alcuna licenza |
| 第3楽章 ワルツ:アレグロ・モデラート
Valse : Allegro moderato |
| 第4楽章 フィナーレ:アンダンテ・マエストーソ - アレグロ・ヴィヴァーチェ
Finale : Andante maestoso - Allegro vivace |

指揮:ドミトリー・キタエンコ Dmitrij Kitajenko, Conductor

管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2016 4/1(金)・2(土)・3(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

ロシアの大作曲家3人の名作を一挙に

今日の3作は、いずれもロシア音楽史を飾るにふさわしい名作ばかり。

前半は20世紀の初頭に生れた2つの作品——まず、若い時から奔放な作風で人々を仰天させていたプロコフィエフが、意表を衝いて18世紀のハイドンのようなスタイルを取り入れた軽妙洒脱な作品「古典交響曲」。次いで、いわゆる「ストラヴィンスキーの3大バレエ音楽」の最初の作品に当たる「火の鳥」を、のちに彼自身が長さを半分に縮め、管弦楽編成もやや縮小させて編んだ組曲版で聴く。そして第2部では、19世紀ロシア最大の作曲家チャイコフスキーの代表作のひとつ、壮大で美しい「第5交響曲」。どれも、オーケストラの色彩感が存分に発揮される作品である。

なお、チャイコフスキーの「5番」第4楽章では、終結近く、「終わった!」と一瞬思わせる個所がある。たいていの指揮者はそこで、「まだ先がありますぞ」という身振りをするが…。

ライター「必聴ポイント」



プロコフィエフ:交響曲 第1番 二長調 op.25 「古典交響曲」

作曲家のお家芸、軽快でウィットにとんだ曲想

躍動感にあふれる明るい交響曲だが、これを本当に軽快に歯切れよく演奏するのは意外に難しい。「第4楽章では短調の和音をすべて避けるように努めた」と作曲家は言う。

ストラヴィンスキー:バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)

原曲は彼の「3大バレエ」の第1作

「ペトルーシュカ」「春の祭典」に先立って書かれた名作バレエ音楽。ロシアの民族的色彩感にあふれる。「魔王カステイの凶悪な踊り」は特にダイナミックな迫力でスリル満点。

チャイコフスキー:交響曲 第5番 ホ短調 op.64

円熟期に入ったチャイコフスキーの魅力満載

壮麗さと憂愁美が素晴らしい。第2楽章は白夜的な美しさの極み。バレエの得意な彼は、第3楽章にワルツを入れた。熱狂的で壮大な終楽章の大詰は、聴き手を興奮に巻き込む。

PROGRAM NOTE

曲目解説——演奏をより深く楽しむために 東条 碩夫(音楽評論家)

プロコフィエフ:交響曲 第1番 二長調 op.25 「古典交響曲」

初演:1918年4月21日 ペトログラード(注1)

若き大胆な作曲家の不思議な野心作

もしハイドゥンがわれわれの時代まで生きていたなら、おそらく彼自身のスタイルを保ちながら、同時に新しいものを受け入れただろう。そういう交響曲を書いてみたい(注2)——1917年、26歳のプロコフィエフは、こうしてこの「古典交響曲」を作曲した。古典派時代の交響曲のスタイルに則った主題の配置構成、引き締まった構築、簡素な2管編成の管弦楽など、いくつかの点で「古典派の交響曲」をモデルにした作品である。ただし第3楽章には、定型の「メヌエット」の代わりに、古典の組曲にヒントを得た「ガヴォット」が取り入れられている。

だが、何しろ彼はそれ以前に、第1番と第2番の「ピアノ協奏曲」や「スキタイ組曲」で大胆奔放かつ荒々しい作風を披露して聴衆を大混乱に陥れたり、批評家に「身の毛のよだつ」思いをさせたりしていた「恐るべき」若手作曲家なのだ。この「古典交響曲」も、彼にとっては、一つの大胆な実験の範疇に属する作品であったとみてよいであろう。事実この曲では、唐突な転調や奇抜な旋律など、いかにもプロコフィエフらしい闊達な才気に富んだアイデアが随所に盛り込まれているのである。

彼はこの曲を自ら指揮して初演したあと、自由な可能性を求め、5月7日にアメリカへ向け(日本を経由して)出発して行くのだった。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

Profile

セルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)

帝政ロシア時代からソヴィエト連邦時代にかけて活躍した。ロシア革命後アメリカに、次いでパリに移り、当時の西欧風のモダンな作風に染まったが、やがて社会主義の「解りやすい音楽」を標榜する作曲活動に魅力を感じ、ソ連に戻り、スターリン政権のさまざまな規制をかわしつつ、名作を発表していった。7つの交響曲(「4番」は別に改作版あり)の他、ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲、室内楽、バレエ音楽、オペラなど、作品多数。



ストラヴィンスキー:バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)

原曲(全曲版)初演:1910年6月25日 パリ

ディアギレフとの共同作業から生まれた最初の名作

ストラヴィンスキーは、その「自伝」の中で——19世紀末までのロシア音楽界では、バレエはオペラに比べて地位が低く、その音楽も付随的なものとしてしか受け取られない風潮があったが、それはチャイコフスキーの手により一掃され、バレエ音楽は本格的な芸術として認められるようになった——と指摘している(注3)。彼がバレエ音楽の作曲に力を入れていったのも、そういった流れを受けていたためだろう。

1908年、27歳のストラヴィンスキーの作品「幻想的スケルツォ」と「花火」がペテルブルクで初演されたが、これを聴いた客の中に、パリを本拠に活躍する敏腕のバレエ・プロデューサー、ディアギレフがいた。これがきっかけでストラヴィンスキーは、パリで上演予定のバレエ「火の鳥」の作曲を依頼されたのである。初めての大きな重圧にためらいながらも、彼はそれを受諾したのだった。

バレエはロシアの伝説に基づくもので、イワン王子が火の鳥の魔力の助けを得て、魔王カスチエイとその手下たちを倒し、囚われていた王女たちを救出するという物語である。パリ初演は大好評で迎えられ、西欧における彼の名声を一挙に高め、会場にいたドビュッシーも舞台に彼を訪ねて称賛の言葉を贈った(同自伝)という。

初演の後、彼は全曲から抜き出した組曲を編んだが、のち1919年になって、「もっと多くのオーケストラが簡単に演奏できるように」、原曲の巨大な管弦楽編成をやや縮小した版の組曲をつくった——それがこの版である。この頃の彼はすでに整然として簡素な「新古典主義」作風に

移っていた時期のため、全曲を書いた頃の「原始主義」の華麗な色彩的民族色はやや薄れているが、今日ではこの版が最も多く演奏されている(1945年に改訂した組曲版もある)。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、サスペンドシンバル、シロフォン、タンバリン、トライアングル、チェレスタ、ピアノ、ハーブ、弦楽5部

Profile

イーゴル・ストラヴィンスキー (1882~1971)

ペテルブルクに生れ、現地で教育を受けたが、ディアギレフと知り合い「3大バレエ音楽」を書いたのを機に西欧に進出、大戦を避けてスイス、フランス、アメリカと居住を移し、ニューヨークで没した。原始主義から新古典主義、十二音技法を取り入れたスタイルへと作風を変化させたため「カメレオン大作曲家」とまで呼ばれた。激烈な「春の祭典」初演(1913年)は、聴衆に与えた衝撃の大きさから、20世紀最大の音楽的事件と称される。



チャイコフスキー:交響曲 第5番 水短調 op.64

初演:1888年11月17日 ペテルブルク

暗から明へーチャイコフスキーならではの美しさ

ストラヴィンスキーはまた、自伝の中で、少年時代にペテルブルクの劇場のロビーで「ロシアの民衆のアイドルだった」チャイコフスキーの姿を見たことが生涯における貴重な記憶として残っている、と感動的に書いていた。チャイコフスキーが、音楽家をを目指す当時のロシアの若者たちにとって、いかに大きな、畏敬すべき存在だったか。その事実、このほかにもラフマニノフら多くの人々により伝えられている。

この「第5交響曲」は、そのチャイコフスキーが世を去る5年前——48歳(1888年)に書いた傑作である。それは「第6番『悲愴』」の5年前、「第4番」の10年後、「マンフレッド交響曲」の2年後、ということになるが、この時期から彼の創作活動は最後の頂点に向けて昂揚して行くのだった。そして、「スペードの女王」や「眠りの森の美女」「くるみ割り人形」といった大作が相次いで

で生み出されることになるのである。またこの頃、彼は毎年のように国外演奏旅行を繰り返し、欧州の有名音楽家との交流を拡げており、その国際的知名度をも急激に高めていた。

とはいえ彼自身、とかく憂鬱になりやすい本来の性格もあって、そうした華やかな外面の活動のさなかにも「精神的に疲れている」と、友人のフォン・メック夫人に手紙で告白していた。1888年5月末に作曲を開始してからも、「なぜか曲の発想が以前ほど潤沢に湧き出て来ない」と手紙で嘆いている。8月26日には全曲を完成し、「前の曲(4番)より悪くなさそう」と自信を語ったが、ペテルブルクで自ら指揮し初演した頃には、今度は「誇張が多すぎて、わざとらしい曲だ」と自己批判に陥った。しかし、12月22日のモスクワ初演が成功するなど、大いに評判が良かったため、だんだんと思い直す…といった具合に、神経質な彼の気持は、この作品においても揺れていたのだった。

第1楽章冒頭でクラリネットに出るホ短調の重々しい主題が、この交響曲全体のモットーともいべき主題である。それは、第2楽章では盛り上がりの頂点で突然出現したり、第3楽章ではワルツの終りに暗く登場したりするため、「運命」を象徴する主題とも言われるが、必ずしもその見方では解決できない多様な性格も備えている。第4楽章ではそれが明るいホ長調に転じ、終結部では勝ち誇った行進曲調に変わって、同じく明るい色調となった第1楽章第1主題とともに、堂々たる頂点を築いて行くのである。

楽器編成

フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

Profile

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840~1893)

19世紀ロシアが生んだ、最も世界的な人気の高い大作曲家。ムソルグスキーらロシアの土俗的な民族楽派グループとは一線を画し、洗練度の高さをにじませたロシア民族色を打ち出した。交響曲、協奏曲、室内楽、オペラなどの分野に人気作品が目白押しだが、特にバレエ音楽の分野において彼が果たした功績は音楽史上にも指折りのものである。後半生は世界的な名声に包まれた日々だったが、その頂点で他界。死因はコレラといわれる。



(注1) ペテルブルクは1914年よりベトログラードと改称され、1924年からはレニングラードとなった。1991年、旧称に復帰。

(注2) 「プロコフィエフ 自伝・評論」 園部二郎他訳、音楽之友社刊

(注3) 「ストラヴィンスキー自伝」 塚谷晃弘訳、全音楽譜出版社刊